

ウズベク語における現在未来接辞-a/-y と現在進行接辞-yap の棲み分け
— 動詞のアスペクト的性格の観点から —

西田 千花子

(南・西アジア課程 ウルドゥー語専攻)

キーワード：ウズベク語，現在未来接辞-a/-y，現在進行接辞-yap，アスペクト，動詞分類

0. はじめに

0.1. 本稿の目的

本稿は、ウズベク語¹の現在時制を表す接辞-a/-y と-yap の2つに注目し、その使用分布を明らかにすることを目的とする。ウズベク語はチュルク諸語の一種であり、アスペクト体系はさほど発達しておらず、テンスと一体化して捉えられている傾向がある。本稿では、動詞の接辞選択に関する簡単な事前調査を元にし、「習慣」という文脈に焦点を当て、日本語と対照させながらウズベク語母語話者へのインフォーマント調査を行なうことで考察を進める。なお、本稿でのウズベク語表記は1993年に採用されたラテン文字正書法²を用いる。

0.2. ウズベク語における時制表現

ウズベク語は、接辞や後置詞を用いる膠着型の言語である。動詞述語は、動詞語幹に時制を表す接辞＋人称接辞を付加して作られる。本稿で扱う時制接辞とは動詞が文末述語として用いられる際のものに限る。具体的には、①単純現在未来を表す-a/-y と②現在進行を表す-yap、の2つである。①現在未来接辞-a/-y は、動詞の不定形語尾-moq を取り除いた語幹のうち、子音終わりの動詞には-a が、母音終わりの動詞には-y が接続される。

1. 先行研究

1.1, 1.2 節では、接辞-a/-y, -yap についての記述がある文献を参照していく。1.3 節は、ウズベク語のアスペクトについての先行研究である。

¹ ウズベク語は、チュルク語の1種であり、チャガタイグループ、若しくは地理的分布から東(南東)グループに分類され、新ウイグル語と最も近い関係にある言語である(庄垣内 1988: 829, 1989: 937)。総話者数は最大で3600万人であり、その約3分の2がウズベキスタン共和国に分布していると言われている。6つの母音音素と25の子音音素が認められる(吉村 2009: 1-3)。チュルク諸語の大きな特徴である母音調和は文法上消失している。SOV 語順であり、接尾辞と後置詞によって文法範疇は表現される(庄垣内 1988: 830)。

² ウズベク語の正書法は、1929年にアラビア文字表記からラテン文字表記へ、1940年にはラテン文字からキリル文字表記へ変更されている(吉村 2009: 1)。

ウズベク語のキリル文字正書法に対するラテン文字正書法、ならびに IPA を以下に示す。

A/a=A/a [a][æ], Б/б=B/b [b], В/в=V/v [v][w], Г/г=G/g [g][j], Д/д=D/d [d], Е/е=E/e [e][e], Ё/ё=Yo/yo [jɔ], Ж/ж=J/j [ʒ], З/з=Z/z [z], И/и=I/i [i][i][u], Ў/ў=Y/y [j], К/к=K/k [k][c], Л/л=L/l [l], М/м=M/m [m], Н/н=N/n [n], О/о=O/o [ɔ][ɒ], П/п=P/p [p], Р/р=R/r [r][r], С/с=S/s [s], Т/т=T/t [t], У/у=U/u [y][u], Ф/ф=F/f [f], Х/х=X/x [x], Ц/ц=Ts/ts [ts], Ч/ч=Ch/ch [tʃ], Ш/ш=sh/sh [ʃ], Ё=i [i], Э/э=E/e [e], Ю/ю=Yu/yu [ju], Я/я=Ya/ya [ja], Ў/ў=O'o' [ɔ][o], К/к=Q/q [q], Ғ/ғ=G'/g' [ɣ], X/x=H/h [h], Ң/ң=Ng/ng [ŋ]

1.1. Nurmatova va Rixsiyeva(2013)

Nurmatova va Rixsiyeva(2013)はウズベク語学の立場から書かれた文法記述である。特にテンスとアスペクトを個別に扱っている箇所は無く、時制に関する記述の中で一つにまとめられている。それぞれに用いられる時制接辞を、以下の表にまとめる。

表 1: 動詞述語における時制接辞

過去時制	近い過去	-di
	遠い過去	-gan
	過去時制伝聞	-b/-ib
	過去時制継続	-r/-ar
現在時制	現在時制継続動詞	-yap, -yotir, -moqda ³
	現在未来動詞	-a/-y
未来時制	目的「～つもりだ、～たい」	-moqchi
	過程・推定「～だろう」	-r/-ar

(Nurmatova va Rixsiyeva 2013: 104 より作成)

当文献の中では、テンス・アスペクトに関するこれ以上の記述は見られない。

本稿で扱う問題の形式である-a/-y, -yap のグロスは、Nurmatova va Rixsiyeva (2013) に従いそれぞれ-NPST, -PROG とする。

1.2. Решетов (1966)

Решетов(1966)は旧ソ連期に編纂された言語事典 *Языки Народов* のチュルク諸語に関する項目の一節に書かれた、ウズベク語の概略である。

ウズベク語の直説法における現在時制は①現在未来時制、②現在時制習慣、③現在時制進行相、の3つに分けられるとしており、うちの①と②は現在時制副動詞⁴すなわち-a/-y に人称接尾辞を付加して作られる、と述べている。しかし、記述量に乏しく、これ以上の言及はされていない。一方で、現在時制進行相に関しては細かく取り上げているが、各接辞間に意味レベルでの違いは見られないため、本稿では現在進行接辞としては便宜的に-yap のみを取り上げることとする。

1.3. ハルナザロフ (2010)

ハルナザロフ(2010)は、ウズベク語のアスペクトについてまとめたものである。本稿で扱う現在時制の習慣においても記述がされている。習慣を表す場合には現在未来形も現在進行形も両方可であるとし、以下の2つの例文を挙げている。下線は筆者による。

³ -yap は主として口語で、-yotir, -moqda は文語で用いられる。-yap と-yotir はほとんど同じものである。-moqda は、-yap の最も固い言い方であると共に、ある動作が幾度かに渡って進行することを示す際に用いると良いとされている。"yozmoqtaman = have been writing for some time. (and will continue to do)" (Raun: 1969)

⁴ Решетов(1966) では、現在未来接辞-a/-y は副動詞(деепричастие) として扱われている。

- (1) Men har kun-i gazeta o'qi-y-man.
I every day-POSS.3.SG newspaper read-NPST-1.SG
- (2) Men har kun-i gazeta o'qi-yap-man.
I every day-POSS.3.SG newspaper read-PROG-1.SG

「私は毎日新聞を読む。」

(ハルナザロフ 2010: 351)

意味レベルでの違い等についてこれ以上の記述は見られないが、参照した先行研究の中では唯一現在未来形と現在進行形の共立について書かれたものであった。

一方、現在進行の動作であれ、恒常的な真理は現在未来形で表されると述べている。

2. 問題提起

ハルナザロフ(2010)で述べられているように、ウズベク語では現在の習慣を表す際に、現在未来形と現在進行形の 2 つの形を取ることができる。しかし、筆者の経験では、実際には現在未来接辞-a/-y の方が多く聞かれる。

先行研究では、個々の接辞について取り上げているものはあるものの、テンス・アスペクトを表す接辞を体系的にまとめたものは管見の限り見当たらなかった。進行形については多くの記述項目がみられたが、習慣を表す接辞に関してはどの先行研究を見ても著しく記述が少なかった。したがって、ウズベク語における現在時制の基本的な接辞の性格やテンス・アスペクト体系を明らかにすることが必要であると考えられる。

3. 調査

初めに事前調査として、大まかな傾向を掴むために計 81 名のウズベク語話者に対しアンケート調査を行なった。その結果、それぞれの動詞により接辞との共起性に特徴があることが明らかとなった。ハルナザロフ(2010)では、「習慣を表す場合は現在・未来形も進行形も可能。」としているが、どちらの接辞に接続するのかという点に関しては、動詞によってばらつきがあるように思われる。本調査では、意味や特にアスペクト的性質を考慮した上で動詞を下位分類したものを、横断的に見ていく。

3.1. 本調査

本調査では、ウズベク語の動詞を意味的側面から分類した Nurmatova va Rixsiyeva(2013)による動詞分類と、現代日本語の動詞をアスペクト的側面から分類した工藤(1995)による動詞分類を用いて、各動詞と接辞-a/-y, -yap との結びつきの度合いや共起性を調べる。工藤(1995)については、次の 3.1.1 節で詳しく述べる。各接辞-a/-y, -yap との共起率を見ることで、動詞のアスペクト的観点から見た分布図を明らかにすることができると考える。

3.1.1. 動詞分類に関する先行研究

本調査では、動詞の持つアスペクト的性格を考慮する必要があると考え、日本語のテン

ス・アスペクトについて体系的に書かれた工藤(1995)の動詞分類を参考にした。

工藤(1995)は以下のような定義を用いて、動詞分類を行なっている。

表 2: 工藤(1995)による動詞分類の定義

		時間内現象・ 時間的展開	特徴	アスペクト対立 ⁵
(A) 外的運 動動詞	(A・1) 主体動作・ 客体変化動詞	成立(開始)・展開・ 消滅(終了) (場合により、結果 も残す。)	ものの動的な運動	○
	(A・2) 主体変化動詞			
	(A・3) 主体動作動詞			
(B) 内的情 態動詞	(B・1) 思考動詞	問わない	思考・感情・知覚・感覚 (人の内的事象)	○(※内的な思考や 感情や感覚は、人 称性と絡む。)
	(B・2) 感情動詞			
	(B・3) 知覚動詞			
	(B・4) 感覚動詞			
(C) 静態動 詞	(C・1) 存在動詞	×	関係・特性 存在・空間的配置	×
	(C・2) 空間的配置動詞			
	(C・3) 関係動詞			
	(C・4) 特性動詞			

(工藤 1995: 70-78 より作成)

それぞれの動詞グループは、切断的であると同時に、連続的である(工藤 1995: 78)と述べている。(A), (C) はアスペクトの有無で、切断的に対立しているが、(B) はその中間に位置づけられる。(C) 静態動詞が、基本的に(「いる」を除いて)、非意志的なものであるとすれば、(B・1) の意志的である思考動詞は、より運動動詞に近く、(B・3) (B・4) の非意志的な知覚動詞、感覚動詞は、より静態動詞に近くなる。

3.1.2. 調査方法

Nurmatova va Rixsiyeva(2013)と工藤(1995)の動詞分類を参考に抽出した動詞を用いて、ウズベク語を母語とするインフォーマント3名⁶に協力を依頼し、アンケート調査を行なった。以下に Nurmatova va Rixsiyeva(2013)と工藤(1995)よりそれぞれアンケートに使用した動詞を表に示す。なお2者の分類で重複している動詞には下線を引いている。

表 3: 本調査アンケートでの使用動詞

Nurmatova va Rixsiyeva (2013) からの抽出動詞 (アンケート設問 1~26)		
動 作	1 動作	ishlamoq 「働く」、mehnat qilmoq 「労働する」、ter to'kmoq 「過重労働する」
	2 思考	o'ylamoq 「考える」、o'qimoq 「読む、学ぶ」、kashf qilmoq 「発明する」
	3 知覚	sezmoq 「気付く」、his qilmoq 「感じる」

⁵ 「スルーシテイル」による日本語のアスペクト対立のこと。

⁶ インフォーマント情報は次の通りである。

A: 21 歳, 女, タシケント出身 / B: 20 歳, 女, ホラズム出身 / C: 24 歳, 男, タシケント出身

ウズベク語における現在未来接辞-a/-y と現在進行接辞-yap の棲み分け
 — 動詞のアスペクト的性格の観点から —

状態	4 感情	kulmoq 「笑う」、xursand bo'lmoq 「嬉しくなる、喜ぶ」、qayg'urmoq 「悲しむ」
	5 発話	aytmoq 「言う」、gapirmoq 「話す」、qichqirmoq 「叫ぶ、わめく」
	6 指示	imo qilmoq 「合図する」、labini burmoq 「唇を噛む」、ko'zini qismoq 「ウィンクする」
	7 肉体状態	og'rimoq 「痛む」、isitma chiqmoq 「熱が出る」、charchamoq 「疲れる」
	8 自然状態	erimoq 「溶ける」、muzlamoq 「凍る」、gullamoq 「花が咲く」
	9 視覚	ko'rmoq 「見る」、qaramoq 「見る」、boqmoq 「看る」
工藤(1995) からの抽出動詞 (アンケート設問 27~51)		
外的運動動詞	ochmoq 「開ける」、qirqmoq 「切る」、o'ldirmoq 「殺す」、yemoq 「食べる」、ko'rmoq, qaramoq 「見る」、o'qimoq 「読む」、urmoq 「たたく」、yurmoq 「歩く」、o'ynamoq 「遊ぶ」、harakat qilmoq 「動く」、o'tirmoq 「座る」、bormoq 「行く」、o'lmoq 「死ぬ」、so'lmoq 「枯れる」、uylanmoq, turmushga chiqmoq 「結婚する」	
内的情態動詞	o'yloq 「考える」、ishonmoq 「信じる」、xohlamoq 「望む」、bezovta bo'lmoq 「心配する」、ta'sirlanmoq 「感動する」、qiyinalmoq 「苦しむ」、hayratlanmoq 「驚く」、shokga tushmoq 「あきれる」、his qilmoq 「感じる」、ko'rinmoq 「見える」、o'girmoq 「痛む」、charchamoq 「疲れる」	
静態動詞	bo'lmoq 「ある・いる」、baholamoq 「値する」、anglatmoq 「意味する」	

以上 51(延べ個数 58) の動詞についてアンケート票を作成した。「結婚する」に関しては、男女で違う動詞を用いるので、その両方を選択肢に挙げた。

事前調査により、習慣を表す場合には動詞により選択される接辞に差はあるものの、現在未来接辞-a/-y の方が頻繁に用いられる傾向が見られたため、設問としては抽出した各動詞をあえて日本語の「(テ) イル」形にし、日本語として自然な表現となる文章を作成した。日本語で作成した各設問に対し、ウズベク語訳を 3 つ(-a/-y を用いたもの・-yap を用いたもの・-moqda を用いたもの) ないし 4 つ(+gan⁷を用いたもの) ずつ用意し、それぞれウズベク語としての容認度を○・△・×の三種類で判別してもらった。また、回答者自身の使用頻度の順位も合わせて回答してもらった。その回答を数値化することで、各動詞のアスペクト的性格から見た分布の図式化を図った。3 つ目の回答パターンである-moqda 形に関しては、-yap に準ずる現在進行の一形態として扱った。1 つの設問におけるインフォーマント 3 名それぞれの《容認度(○・△・×)》・《使用頻度(1, 2, 3, 4)》の回答を項目別にカウントし、それぞれの項目に対し、-a/-y 性が高い場合は大きく、-yap 性が高い場合には小さくなるように変数を与えて数値化し、結果を一覧表ならびに分布図に表した。

3.1.3. 調査結果

3.1.3.1. Nurmatova va Rixsiyeva (2013) の場合

まず、Nurmatova va Rixsiyeva(2013)による動詞分類を用いた調査だが、動作動詞・状態動詞、また下位分類に関係なく、幅広くそれぞれの動詞が分布する結果となった。故に、Nurmatova va Rixsiyeva(2013)による動詞分類は、現在未来接辞-a/-y と現在進行接辞-yap の使用分布に関しては、特に関連性が無いように思われる。

⁷ 表 1 を参照。完了、大過去、結果継続などを表す。設問によって、4 つ目の回答パターンとして接辞-gan を用意したが、あくまで参考の為であり、今回の論文のテーマとは異なるものであるため、結果分析においては除外し処理を行なった。

3.1.3.2. 工藤(1995)の場合

工藤(1995)による動詞分類を用いた調査結果を表4に示す。現在未来接辞-a/-y との結びつきが強いものが上位に、現在進行接辞-yap との結びつきが強いものが下位に位置している。最右列◆・*・■はA, B, Cを表し、図1に従うものである。表中点線は、標準値の8.7⁸を示す。

表4: 調査結果(工藤 1995: による動詞分類を用いて)

分類	Jp.	Uz.	容認度	頻度	合計値	
A・3	見る	qaramoq	18	0.6	18.6	◆外運
A・1	開ける	ochmoq	18	0.6	18.6	◆外運
A・1	切る	qirqmoq	18	0.6	18.6	◆外運
A・3	食べる	yemoq	18	0.6	18.6	◆外運
A・3	歩く	yurmoq	18	0.6	18.6	◆外運
A・1	殺す	o'ldirmoq	16	0.6	16.6	◆外運
A・3	遊ぶ	o'ynamoq	16	0.6	16.6	◆外運
A・2	座る	o'tirmoq	16	0.5	16.5	◆外運
B・1	信じる	ishonmoq	15	0.6	15.6	*内情
A・3	動く	harakat qilmoq	13	0.6	13.6	◆外運
B・1	望む	xohlamoq	13	-0.8	12.2	*内情
A・2	結婚する	uylanmoq	12	-0.2	11.8	◆外運 *
A・2	結婚する	turmushga chiqmoq	12	-0.2	11.8	◆外運 *
C・3	意味する	anglatmoq	10	0.6	10.6	■ 静態
B・2	あきれる	shokga tushmoq	10	0	10	*内情 *
A・2	死ぬ	o'lmoq	10	-0.1	9.9	◆外運 *
A・3	読む	o'qimoq	9	0.6	9.6	◆外運
A・2	行く	bormoq	9	0.6	9.6	◆外運
A・3	見る	ko'rmoq	9	0.5	9.5	◆外運
B・1	考える	o'ylamoq	9	0	9	*内情
B・3	見える	ko'rinmoq	7	0.3	7.3	*内情
B・3	感じる	his qilmoq	8	-0.8	7.2	*内情
B・4	痛む	o'grimoq	7	-0.6	6.4	*内情
A・3	叩く	urmoq	6	0.1	6.1	◆外運
A・2	枯れる	so'lmoq	6	-0.1	5.9	◆外運 *
B・2	感動する	ta'sirlanmoq	4	-0.6	3.4	*内情
B・4	疲れる	charchamoq	3	-0.7	2.3	*内情 *
B・2	心配する	bezovta bo'lmoq	3	-0.8	2.2	*内情
B・2	驚く	hayratlanmoq	3	-0.8	2.2	*内情
B・2	苦しむ	qiynalmoq	2	-1	1	*内情
C・1	存在する	bo'lmoq				
C・3	値する	baholamoq				

⁸ 《頻度》項目(α)・《容認度》項目(β)の数値処理後の値の範囲は、それぞれ $-12 \leq \alpha \leq 6$ 、 $0 \leq \beta \leq 18$ であり、合計値(γ)の範囲は、 $-1.2 \leq \gamma \leq 18.6$ であることから、本調査における合計値の標準は8.7となる。

(A) 外的運動動詞が比較的上位に、(B) 内的情態動詞が比較的下位に分布していることがわかる。(C) 静態動詞については、選択した動詞に偏りがあり(bo'lmoq「存在する」やbaholamoq「値する」は現在進行接辞-yap をとらない)、この度の調査では有効な結果を得ることはできなかった。

動詞の分布は図1の通りである。図は、縦軸が《頻度》を、横軸が《許容度》を表している。同じ縦列にあるものは許容度としては同じだが、横列で見た際より上にあるものの方が、使用頻度が高いことを示している。すなわち、図全体としては、右・上にあるものほど現在未来接辞-a/-y との、左・下にあるものほど現在進行接辞-yap との結びつきが強い動詞であることを表している。

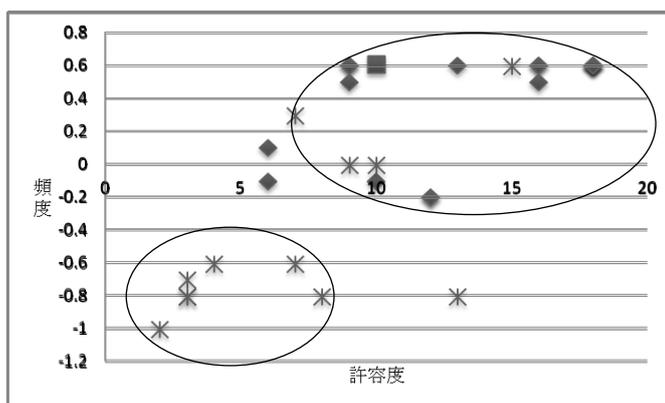


図1: 動詞分布図

(工藤 1995 による動詞分類を用いて)

4. 考察・まとめ

3.1.3.1 節でも述べたように、意味的側面から動詞分類を行なった Nurmatova va Rixsiyeva(2013)を用いた調査では、接辞-a/-y, -yap の棲み分けは明確には現れず、有意義な結果を得ることはできなかった。一方で、動詞そのものが持つアスペクトの特徴の面から動詞分類を行なった工藤(1995)を用いた調査では、接辞-a/-y, -yap 間に共起する動詞に一定の傾向が見られた。

結果数値が大きく-a/-y 性の高かった動詞は、工藤(1995)による動詞分類の中で(A)外的運動動詞に属するものである。次に、結果数値が小さく-yap 性の高かった動詞は、(B)内的情態動詞に属するものである。表2における(A), (B), (C)の下位分類に関しては、全体としての大きな特徴的傾向は特に見られなかったものの、(B・1)思考動詞、(B・2)感情動詞、(B・3)知覚動詞、(B・4)感覚動詞、の4つのみを見た場合には、(B・1)思考動詞は中間から上位に位置し、(B・1)に関しては、工藤(1995)の(A), (B), (C)が連続的であるという分類定義と当てはまる結果となった。(B・3), (B・4)に関しては、(B・1), (B・2)と比べ、設問数が少なかったものの、(B・3)知覚動詞の方が比較的平均値に近く、(B・4)感覚動詞の方が-yap 性が強いという傾向が見られた。(B・2)感情動詞は最下位に多く分布した。

以上を踏まえ、工藤(1995)による動詞分類を用いた本調査の結果を、下記表5のように整理し、接辞選択に関する動詞分類の一案として提示する。

表 5: 本調査結果に基づく接辞選択に関する動詞分類の提案

(A) 外的運動動詞	A・1	-a/ -y への接続の度合いが高い	↑
	A・2, A・3		
(B) 内的情態動詞	B・1	↓	← 平均値 8.7
	B・3		
	B・4		
	B・2		

5. 今後の課題

今回の調査では、外的運動動詞と内的情態動詞の分布は明らかになったものの、静態動詞に関してはほとんどデータを得ることができなかった。静態動詞に分類されるようなウズベク語の動詞は、形態・統語的に特徴があり、日本語の動詞への翻訳の段階で困難が伴ったことに原因があると考えられる。今後は、静態動詞にフォーカスを当てた調査を行っていく必要がある。

略号一覧

-: 接辞境界 / 1, 3: 各 1, 3 人称 / NPST (non-past): 非過去 / POSS (possessive): 所有 / PROG (progressive): 進行アスペクト / SG (singular): 単数

参考文献

- ハルナザロフ, マルムジョン (2010) 「ウズベク語(データ:「アスペクト」, テーマ企画:特集「アスペクト」)」『語学研究所論集 no.15』 348-354. 東京外国語大学語学研究所. / 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 東京: ひつじ書房. / Nurmatova, M. va G. Rixsiyeva (2013) *O'ZBEK TILI*. Tashkent: Toshkent davlat sharqshunoslik instituti. / Raun, Alo (1969) *BASIC COURSE IN UZBEK*. Bloomington: Indiana University. / Решетов, В. В (1966) *Узбекский Язык. Языки Народов СССР т.2 Тюркские языки*. 340-362. Москва: Наука. / 庄垣内正弘 (1988) 「ウズベク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編(上)』 829-833. 東京: 三省堂. / 庄垣内正弘 (1989) 「チュルク諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』 937-950. 東京: 三省堂. / 吉村大樹 (2009) 『LiCCOSEC (民族紛争の背景に関する地政学的研究) Vol. 4 ウズベク語文法・会話入門』 大阪: 大阪大学世界言語センター.